

みんなで伝えたい 地域の歴史と自然

ふどうの森に 行ってみよう

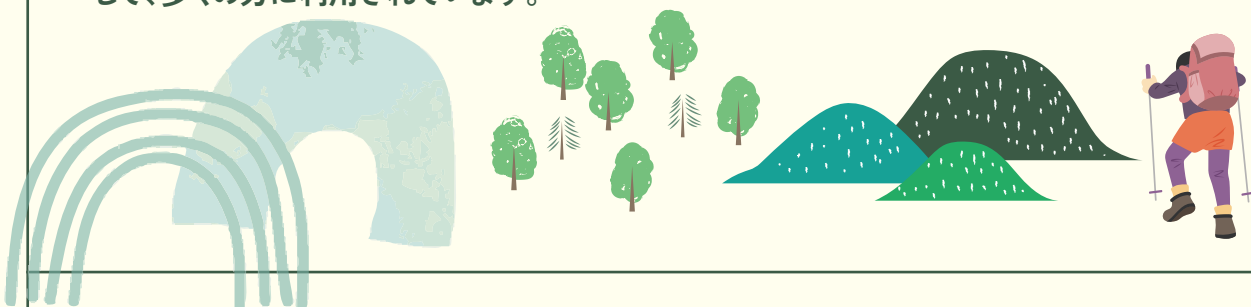


ふどうの森ガイドブック

ふどうの森ってどんなところ？

関市の南部、各務原市との境界には、「関南アルプス」と呼ばれる山並みがあります。その関南アルプスに位置し、西の大岩不動から東の迫間不動までの126haの森を「ふどうの森」と呼んでいます。

この森は、昭和54年～56年にかけて生活環境保全林として整備されたもので、花木等の植栽、溪流の整備、探索路や休憩所を設置し、自然探求や来山者の健脚の場として、多くの方に利用されています。



1 明王山見晴台

北側は中央アルプスの山々をはじめ、御嶽山、乗鞍岳などの日本百名山を眺めることができます。南側は濃尾平野に広がる市街地や、犬山城、小牧山城に加え、天気がよいと名古屋城まで3つの城を一望できます。頂上には、令和4年度に関商工高等学校機械科の生徒と、地元の方々の協力で、平和の鐘が設置されました。



明王山見晴台
位置情報はコチラ



2 迫間城跡

かつて、迫間山には迫間城と呼ばれたお城がありました。いつ、だれが築城したのかは不明ですが、古くは国境の砦として使われており、戦国時代には監視用の城として使用されていたのではないかと推測されます。現在でも曲輪の跡が残っており、歴史の名残を身近に体感できます。



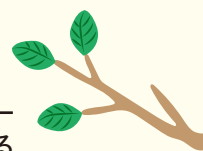
迫間城跡
位置情報はコチラ



3 のべぶり岩

明王山見晴台よりこんぴらみちに至る道中には、のべぶり岩と呼ばれる大岩が存在します。昔、名古屋の米相場を岐阜県内に伝えるため、旗信号で尾張の小牧山からの情報を美濃・飛騨に知らせていた場所と伝えられています。

のべぶり岩
位置情報はコチラ



4 迫間不動尊

迫間不動尊は美濃三大不動の1つとして1200年の伝統を誇り、加持・祈祷の主尊として広く信仰されています。毎月の命日(28日)や3月、9月の第4日曜日に行われる大祭はより多くの人でにぎわいます。



迫間不動尊
HPはコチラ



ポイント

ここも見てみよう！

本堂前には泥岩層が露呈しており、海底のプランクトンによりできた層を見ることができます。これは、この山が恐竜のいた2億5千万年前に、海底が隆起してできたことの証拠です。

5 コープぎふの森・関

平成22年より生活協同組合コープぎふと関市、中濃森林組合、岐阜県の4者が協定を結び、地元ボランティアの協力のもと、植樹体験、しいたけ狩りなど様々な活動を展開しています。



ふどうの森 トレイルラン大会

TRAIL RUNNING

ふどうの森トレイルラン大会は、平成29年から開催されています。コースは、3kmのキッズコース、ウォーキングコースから44kmのロングコースまであり、毎年、県内外から多くの方が参加し、地域の活性化や地元の人たちの地域交流の場となっています。

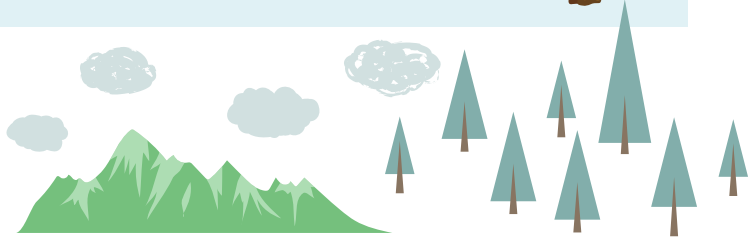


トレイルランの魅力

豊かな森の空気、鳥の声、川のせせらぎなど、五感で自然を感じながら走ることができます。

SPECTACULAR VIEW

明王山見晴台から 見える絶景



●各務原市側



●関市側



●坂祝町側

PLANTS

豊かな森を作る植物たち

ふどうの森にはさまざまな植物が生息しています。そして四季折々に、花を咲かせ、実をみのらせます。小鳥や動物、昆虫、たくさんの命が息づく豊かな自然を育てています。



春 夏
冬 秋



どんな花が咲いているかをさがしてみましょう



耳を澄ませて聞いてみよう！ たくさんの鳥たちの声

ふどうの森には、さまざまな野鳥がやってきて、森の中で賑やかにさえずっています。ふどうの森に一年中住んでいる鳥もいれば、季節ごとに渡ってくる渡り鳥もあります。森の中から聞こえる声を頼りに、たくさんの鳥を探しながらハイキングするのも楽しいですよ。

夏鳥

東南アジアの方から、海を渡ってやってきます。夏鳥の目的は子育て。ふどうの森で繁殖をする種類のほか、さらに北の白山を目指す種類もあります。温帯域の日本では、夏は虫が多く出る時期です。その時期に合わせて渡来することで、ツバメやオオルリなどの昆虫を食べる鳥たちは、ヒナを育てるのに十分な食べものを得ることができるのです。



冬鳥

シベリアなどから、水鳥や小鳥の仲間が日本にやってきます。北の大地では、地面が雪や氷におおわれてしまい、水面で生活する水鳥や、地面でえさを探す小鳥たちは生きていくことができません。そのため冬鳥たちは、食べものを求めて、あたたかい日本へ渡ってくると考えられています。



留鳥

年間を通して同じ場所に生息し、季節による移動をしない種類の鳥のことをいいます。



漂鳥

春夏に国内の山地や涼しい地域で繁殖し、秋冬に市街地や温かい地域にやってくる種類の鳥です。夏鳥や冬鳥などの渡り鳥は国境を超える規模で移動をしますが、漂鳥は日本国内を移動します。漂鳥（漂う鳥）という名称ですが、狭い範囲を移動する種類の鳥と考えるとわかりやすいでしょう。





はたごやま はたごいわ 機子山～機子岩

下迫間部落の東南の外れにある工場の裏山の八合目ほどのところに、大きな岩がある。その岩の近くの「蟹ヶ洞」からは谷水が湧き出ており、昭和の始め頃までは、天然氷をつくるための池があった。その岩には、二つの大きな岩穴が並んで口を開けている。これは、その岩穴にまつわる話だ。

むかしむかし、下迫間が朝廷の領地だった頃のことだ。

村人は、毎年たくさんお米を熱田神宮へ納めておった。米があまりとれない時代のことだったので、働いても働いても暮らしはいっこうに楽にならぬ。そのため村人は、それはそれは貧しい暮らしをしておった。

この村に、たいそう美しく、親孝行の娘が住んでおった。娘はいつも

「機（織物をつくる機械）が欲しい。機があれば自分たちの着物を作ることも出来るし、できた織物売って、我が家の暮らしを助けることもできる」

と、思っておった。

一番高い『御嶽山』に登った。そして「神様、私に機をお授けください」と、一心不乱にお祈りした。お祈りをはじめから丁度二十一日目の帰り道のことだ。

「なぜ神様は、私の願いを聞いてくださらないのだろう？」

と、嘆きながら疲れた足を引きずって山を下りてゆく娘が、岩穴のそばを通りかかった時、ふと岩穴のほとりに、湧き出している泉を見てびっくりした。水の中に機が見えるではないか。あたりを見回してみると、岩穴の中に機があり、それが水面に映っていたのである。「あった！」

娘は大喜びでさっそく織物を織り始めた。

バタン バタン バタン バタン

毎日、岩穴から機を織る音が聞こえてくるようになった。

そんなある日のことだ。旅の若者がこの近くを通りかかった。

「おや、あんな高い所から機の音が聞こえてくる。どうしたことだ」

不思議に思った若者が、岩穴まで登ってみると、美しい娘が機を織っていた。娘を一目見るなり、若者は娘の虜になってしまった。

「ちょっと一休みして外へ出てみないか」「旅の話聞かせよう」

などと、若者は熱心に娘に話しかけた。けれど、娘は黙ってニコニコと笑ってうなずくだけであった。そうして20日ほどたった時のことだ。

「こうすれば相手になってくれるかもしれない」

と若者は織りかけの機糸を切ってしまった。

バタン！

大きな音でハッと我に返った若者が目の前をよくみると、ススキの花が若者に向かってゆらりとそよいでいた。

「おやっ」

と、思っ周囲を眺めてみると、娘が隣の岩穴からできあがった織物を持って出てくる場所だった。若者は、初めて自分がススキを相手に話していたのに気がついた。

こうして、娘が機を織っていた岩穴を『大機子』、若者が話をしていた岩穴を『小機子』と呼ぶようになった。

その後の二人がどうしたかって？さあてな

ふどうの森
トレッキングマップはコチラ

